

■飯尾宗祇 連歌師。日本独自の漂白の詩人として連歌を代表し、和歌の西行と俳諧の芭蕉を繋ぐ役割を果たした。

いいおそうぎ

・・・・・・・・1421= 生。

義教籤引將軍1428= 7歳：

尚氏王統確立1430= 9歳：

若年より京都相国寺に入り、

永享の乱始・1438=17歳：

永享の乱終・1439=18歳：

嘉吉の乱・1441=20歳：

・・・・・・・・1448=27歳：

・・・・・・・・1450=29歳：_この頃より連歌に志したという。初め宗禰に師事、

古河公方始・1455=34歳：_宗禰が死去したため、専順を師とする。

道灌江戸城始1457=36歳：_専順発句の「法楽何路百韻」が現存する最初の作品。以後、修業を積んで、

さらに心敬にも学ぶなど、指導者にも恵まれた。

蓮如御文始・1461=40歳：「何人百韻」を詠む。

・・・・・・・・1464=43歳：「名所百韻」を詠む。細川勝元らの「熊野千句」に参加。

・・・・・・・・1465=44歳：*心敬・専順らの「何人百韻」に同座。この頃には地位を確立した。

・・・・・・・・1466=45歳：東国に下向、「長六文」を著す。_この年、18歳の宗長が入門(丁度27ちがいで弟子育成の例)。

徳仁の乱始・1467=46歳：*連歌論の傑作「吾妻問答」を著す。

・・・・・・・・1468=47歳：「白河紀行」を著す。

・・・・・・・・1470=49歳：「名所百韻」を詠む。

蓮如吉崎御坊1471=50歳：東常縁、宗祇に古今伝授を行う。「三島千句」を詠む。

・・・・・・・・1472=51歳：「古今和歌集二度聞書」成る。「山何百韻」を詠む。それまで、東国を活動拠点にしていたが、

足利義政隠居1473=52歳：_この年以後、公家や將軍、管領の居住する上京に種玉庵を結び、三条西実隆、細川政元らの公家や幕府の上級武士と交わった。また畿内の有力国人衆や周防の大内氏、若狭の武田氏、越後の上杉氏ら各地の大名を尋ねている。「宗祇初心抄」を著す。古今伝授完了。

加賀一揆始・1474=53歳：「何木百韻」を詠む。自撰第一句集「萱草」を編む。

・・・・・・・・1475=54歳：「種玉編次抄」を著す。

・・・・・・・・1476=55歳：「竹林抄」を編む。専順が死去。_幕府の連歌会に初めて参加。

徳仁の乱終・1477=56歳：「何船百韻」を詠む。

・・・・・・・・1478=57歳：「百人一首抄」を著す。

山科本願寺・1479=58歳：「老のすさみ」を著す。

・・・・・・・・1480=59歳：_山口から太宰府に旅し、紀行文の傑作「筑紫道記」を著す。

兼良+一休没 1481=60歳：「宗祇発句判詞」自撰第二句集「老葉(わくらば)」(初編本)を著す。

義政政權放棄1482=61歳：宗伊・宗祇「連歌嫌様事」を定め、「湯山両吟」を詠む。東常縁、宗祇に「拾遺愚草」の口伝を授ける。

銀閣寺造営始1484=63歳：「自讃歌注」を著す。

山城国一揆・1485=64歳：「雨夜談抄」を著す。_三条西実隆への「源氏物語」の講義を始める。以後、求められての講義・講釈あるいは伝授が多くなる。

太田道灌暗殺1486=65歳：「住吉社法楽和歌」を張行する。

・・・・・・・・1487=66歳：宗祇ら「葉守千句」を詠む。

加賀一揆支配1488=67歳：「能勢頼則千句三物」を詠む。「分葉」を著すか。*北野連歌会所奉行(宗匠)となり、名実ともに連歌界の第一人者となった。肖柏・宗長と傑作「水無瀬三吟何人百韻」を詠む。

「連秘鈔」「会席二十五禁」を著す。_早くも連歌会所奉行への辞意を表明。

銀閣寺完成・1489=68歳：「人麿影供三十首和歌」を詠む。_肖柏・宗長と傑作「湯山三吟」を詠む。

・・・・・・・・1492=71歳：「何路百韻」を詠む。

明応の政変・1493=72歳：内裏で「北野社奉納百韻連歌」行われる。自撰第三句集「下草」成る。

早雲小田原城1495=74歳：「淀の渡」を著すか。_連歌会所奉行を兼載にゆづったのち、「新撰菟玖波集」を編集した。

・・・・・・・・1496=75歳：「何人百韻」を詠む。「嫌物五十二ヶ条」を著す。

・・・・・・・・1498=77歳：近衛尚通に古今伝授を行う。

蓮如没・・・・1499=78歳：「宗祇独吟何人百韻」を詠む。都を離れ、近郊を旅したのち、

・・・・・・・・1500=79歳：越後に着く。「浅茅」成る。

・・・・・・・・1501=80歳：使いを立てて、三条西実隆への古今伝授を終える。

・・・・・・・・1502=81歳：_弟子の宗長、宗禰らに伴われて越後より美濃に向かう途中、箱根山湯本の旅宿で没し、駿河国桃園(裾野市)定輪寺に葬られた。宗長が「宗祇終焉記」を著した。

吉川弘文館人物叢書、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典」、「人物日本歴史館」、平凡社百科事典、「目でみる日本人物百科」、歴史有名人の死の瞬間、日本の古典名著、